

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「写真」を活用したエスノグラフィーの実践：
フォト・エスノグラフィーの基本モデルの精緻化＜
共同研究：
フォト・エスノグラフィーの実践に関する方法論の
検討＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2024-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩谷, 洋史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/0002000118

「写真」を活用したエスノグラフィーの実践

—フォト・エスノグラフィーの基本モデルの精緻化

岩谷 洋史

研究方法としてのエスノグラフィー

エスノグラフィーは、日本語で「民族誌」と訳される。それは研究活動の成果物を示すものとして捉えられることが多い。しかし、本共同研究では、エスノグラフィーをそこに至るまでの研究手法として理解することを出発点とする。

この研究手法を採用する調査者は、ある特定のフィールドの人びとと密接に関わりあひながら、人びとのさまざまな信念や行為などを探求することになる。そして、フィールドで生起するさまざまな事象を、単純に抽象化して表してしまうことを極力抑えながら、細かな点まで注意を払って、客観的、かつ、整えまとまった形でありのままに記していくことが優先される。つまり、エスノグラフィーの実践とは、「参与観察」を基本としたフィールドワークという経験的な調査手法を通じて、フィールドの人びとの生活世界を具体的かつ、体系的な体裁によって整えられた記述に落とし込んでいく作業である。

この研究方法を用いた一連の過程は、すでに何かが確定している状態に置かれているとはけっして言えない調査者が、フィールドへ移動することによって始まる。移動後、調査者は、調査者を取り囲むように現れる人間（あるいは、場合によっては人間以外のものかもしれない）と互いにやりとりしながら、次第にフィールドと関わることになる。それは調査する側と調査される側が出会う接触領域とも言うべき場の

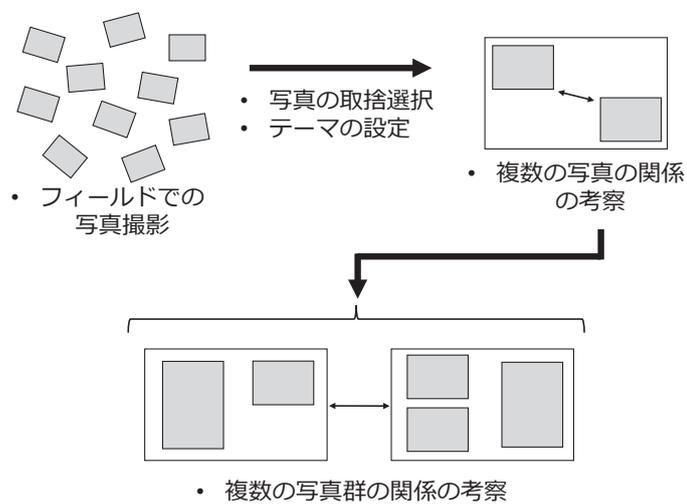
なかで、何かが生まれるものへの双方の関わりであると言えるかもしれない。

人類学における写真の活用

このようなエスノグラフィーの実践で中心的な役割を担うのは、現在においても文字媒体であるものの、視覚的な媒体の1つである写真を文字媒体と同等のものとして位置付け、エスノグラフィーの実践の中心に写真を据える試みが、本共同研究で想定されているところの「フォト・エスノグラフィー」である。

人類学の研究活動で写真を活用するという歴史は長い。たとえば、20世紀初めには、すでに写真は重要な調査資料となっていた。調査者は資料として写真を取得する試みを行い、ある特定の民族の文化や社会を視覚的に記録したり、現地の文化的事象を分析したり、解釈したりするための道具として写真を活用してきた。

写真は、基本的に指標的性質をもった像であり、その指示対象と直接的な結びつきを有する記号であると考えられる。写真のその特性がゆえに、客観性を保証しうる資料として研究者は写真に期待し、活用してきたのである。デジタル情報の静止画像に客観性が確保できるのかという議論がある昨今であっても、調査者はフィールドで撮影した静止画像を「写真」と呼び、それと同類のものとして扱っている。画面に映し出された像が被写体と繋がっていることを前提として思考



フォト・エスノグラフィーの模式図（筆者作成）

岩谷 洋史 (いわたに ひろふみ)

姫路獨協大学人間社会学群講師。専門は、文化人類学、経営人類学。論文に「『見えないもの』の気配を知るための技術—酒造り現場での実践を事例として」木村大治・花村俊吉編『出会いと別れ—「あいさつ」をめぐる相互行為論』（ナカニシヤ出版 2021年）など多数。

を展開することができ、しかも、ある瞬間を切り取って時間を捨象した像として、文字媒体では描写が容易ではない事実も詳細かつ具体的に見せるものとして目の前に現れる。

しかし、それ以上に重要なことは、視覚的資料は、対象を具体的に表現し、他者にも容易に理解を促し、情報共有を円滑に進める媒体であることである。とりわけ静止画像としての写真は、情報伝達力の点で優れていて、かつ、調査者が管理（整理、編集など）しやすいという意味で利便性の高い媒体である。また、写真の構図や見せ方を調整することで、撮影者の意図を入れ込み、閲覧者が読み取る意味を誘導させることもできると考えられる。

デジタル機器の発展によって画像を生成させることが容易になったため、現代社会は、写真を含めた画像が至るところに存在するのが顕著になっている時代である。そして、必ずしも言語的ではない新しい様式で、世界のなかでの人間の存在を方向付ける必要があり、またそれを考察することも重要となっている。

人類学の研究活動でも、フィールドで静止画像としての写真を取得することが多くなった。デジタルカメラは、調査者が対象に関する情報を視覚情報として簡便に記録することを容易にし、従来のフィルムカメラとは異なった写真撮影の経験を調査者にもたらしている。だが、それらの活用方法は必ずしも明確であるとはけっして言えない。そして、何よりも写真は、エスノグラフィーの実践においていまだに補助的な位置付けに置かれたままなのである。視覚的なものへの依存が高まっている時代に、古くから形を変えて存在し続ける媒体を模索することは有意義な行為であると言える。

フォト・エスノグラフィーの実践

先に、エスノグラフィーとは自ら収集した調査資料に対して何らかの秩序を与えていく過程であると述べた。とりわけ、調査資料をもとに、調査者自身のフィールド体験を再構成する際に重要なことは、いかにして他者と意味を共有しうるものとして提示できるのかということである。共有を考慮に入れるならば、必要なことは、少なくとも、他者に論理的に提示していくことである。ただ、考えなくてはならないのは、論理的に構成していくという行為が一体、いかなるものであるのかということである。

この考え方を写真資料に応用して簡潔に言うならば、フォ

ト・エスノグラフィーによる成果物とは、調査者がホームとフィールドとの往復で取得された多くの写真を取捨選択し、それらの関係を考えて上で、整理し、並べたものであると言える。それは、たとえば、組み写真の手法を用いたものになるのかもしれない。この時、成果物を制作する者は、写真と写真の関係を考える必要がある。つまり、論理的に再構成するためのいくつかの基準が関わることになる。写真を見せていく順番を決めていくことは、組み替え、並べていくという意味で、写真が撮影された時間を操作して、空間的に秩序を作り出していく行為となる。調査者は、この過程において、いわば、時間と空間の操作をしていると言えるだろう。

本共同研究の期待される成果

本共同研究では、フォト・エスノグラフィーの基本モデルを精緻化することを目的としているが、期待される成果は次のようなことが挙げられるだろう。

第1に、エスノグラフィーそれ自体の再考も並行して行いつつ、書記言語を基本とする従来型エスノグラフィーや動画である映像を基本とするエスノグラフィーのどちらでもない、別種の視覚的なエスノグラフィーの可能性を拓くことである。写真それ自体に関する人類学からのアプローチが必ずしも体系的に行われていない現状に一石を投じ、その独自の価値や重要性を再認識することがなされるだろう。第2に、元々、人類学を学ぶ学部生や大学院生の調査実習を運営していくことを端緒に、フォト・エスノグラフィーを構想した経緯もあり、モデル構築や定式化によって、初心者向けのエスノグラフィーの実践の教示方法を見出すことである。第3に、人類学だけではなく、近年、質的研究法の1つとして捉えられているエスノグラフィーを研究活動に採用していこうとする高まりがある心理学、看護学、情報工学、経営学（とくにマーケティング）の各分野に対して知識を提供できることである。

これまで、視覚的な媒体の1つである写真を資料としてもっぱら活用していくエスノグラフィーを構想し、そのモデルの構築のための試行錯誤を行ってきた。本共同研究は、これまで研究活動で得られた知見を踏まえて、人類学に隣接する分野である民俗学、社会学、認知科学、あるいは写真研究家、写真論を展開する美学分野などの関連分野の研究者で研究活動を推進させていきたい。